

「国宝茶室 如庵」

如庵

織田有楽の最高傑作といわれる「如庵」は、彼の茶の美学と個性の表現である。千利休（1522-1591）のような茶人たちが築いた茶の湯建築の定石から、様々な意味で逸脱したデザインであるが、それにもかかわらず（あるいはそれゆえに）、如庵は名作として名声を保ってきた。名画画家の尾形光琳（1658-1716）は、この茶室を賞賛し、自分用に複製を注文し、（現在は京都の仁和寺に保存されている。如庵は、世界で最も多く複製されている茶室と言われている。

初期の歴史

1621年、有楽の死後、その遺品は建仁寺が管理下に置かれた。1872年、明治新政府が全国の仏教施設の力と影響力を低下させる政策を取るまで、寺は寄付によって維持された。建仁寺の寺領などは強制的に競売にかけられ、有楽邸の正伝院書院、如庵、茶庭（露地）などの所有権が京都・祇園に譲渡された。建物は「有楽館」と改称され、茶葉の加工など様々な用途に使われた。1908年、祇園はこの建物を全国の業者に売却した。その中に三井高棟という人物がいた。

三井家

三井高棟（1857-1948）は、19世紀末の富裕な商家である三井家の10代目当主であった。生涯にわたって茶の湯を学び、伝統的な建築物にも造詣が深かった。正伝院書院と如庵、そしてその茶庭を購入し、1908年に東京・麻布の自邸に移築させた。1938年、三井は神奈川県大磯の別邸に隠居することを決め、建造物を移築させた。三井は、老後は茶の湯に専念したいと考え、密集した東京の街では火災の危険が常につきまことを懸念していた。そのおかげで、第二次世界大戦で東京が焼け野原になった東京には、この建物はもうなかった。

犬山に移転

三井高棟の死後間もない1951年、如庵は国宝に指定された。1969年、名鉄（名古屋鉄道）は三井家の大磯邸の権利と建造物、美術品などを取得した。これが、有楽苑の設立のきっかけとなった。1971年初め、「如庵」を犬山に移すための準備が始まった。まず、建物を徹底的に調査した。当時としては画期的なレントゲン撮影を行い、壁や支柱の状態を確認した。分解が始まると、丁寧に図面と寸法が取られ、部品に番号が振られた。それぞれを中綿と防水カバーで包み、玄関部分（土製の前庭とその周囲の壁）は、木製の骨組みの中に入れて、さらに構造的に支えた。作業員は振動吸収装置を取り付けた大型トラックに積み込み、1971年3月31日午前1時30分、如庵はNHKの取材班を乗せて大磯を出発した。

途中の高速道路の料金所で、積荷が、高さ制限をかすかに超えたため、1台のトラックが止められるという大きなハプニングがあった。茶室に被害はなかったが、料金所の職員はトラックを通そうとせず、業を煮や

した名鉄の社員がようやく説得した。

復元と修復

如庵は無事犬山に到着し、修復師たちによって再建作業が開始された。屋根の雨漏りなどによる浸水などの影響もあり、茶室には修理が必要な部分もあったが、元の建物を保存することに力を注いだ。部分的に腐った支柱など、傷んだ構造部分は合成樹脂で補強し、木のような質感を出すために塗装を施した。また、屋根の板材など、交換が必要なものは、当時の工法と材料で製作した。

この機会に、修復師たちは長年にわたって行われてきた如庵の改造を元に戻した。大磯では建物の配置が変わっていたのに対し、如庵と正伝院書院は、有楽の京都邸の配置の史料に基づき、再び接合された。大磯では、書院の南東角から外廊下で結ばれていた。有楽苑では、この通路を撤去し、書院の縁側から直接如庵に入れるような配置にした。

建築の特徴

茶会の客は、建物の南西側にある屋根付きの玄関空間から入室する。侍は、刀を抜き襖の奥の小室にある刀掛けに刀を納める。客は全員履物を脱いで、低い位置にある小さな入口（にじり口）から這うようにして狭い部屋に入って行く。如庵の茶室はわずか 3.5 畳半（約 6.2 平方メートル）しかない。これは千利休が好んだとされる 2 畳間よりは広いが、小間の限度である 4.5 畳の範囲内である。有楽が客人の快適さを重視したことは、茶室をより広々とした設計にしたことにも表れている。

また、有楽は比較的明るい茶室を好んだ。そのため、如庵の屋根には天窗のような突き上げ窓がある。また、東側の壁には「有楽窓」と呼ばれる、如庵独特の窓が 2 つある。この四角い窓は、細い竹が垂直につめ打ちされている。窓を開けておくと竹の隙間から光が入り、障子を閉めると竹の影が映し出され、上品な陰絵ができる。

正面の壁と低いにじり口の反対側には、別の形式の窓が見える。これは下地窓と呼ばれている。この窓は、壁の一部を漆喰で仕上げることなく、その下にある竹と葦の格子を露出させたものである。

如庵の装飾で非常に珍しいのは、外からは見えないところにある。茶室の壁の下 3 分の 1 は古い曆で埋め尽くされており、中には 1629 年までさかのぼるものまである。これは「曆張り」と呼ばれる装飾技法で、身近なものを再利用し、無駄なものを一切使わない庵の素朴さをイメージしている。